

安藤謙治の社会事業思想に関する一考察

昭和初期の金沢市における社会事業の発展を支えた人物の研究

大 村 隆 史

- I はじめに
- II 社会事業史における方面委員制度の評価と分析の枠組み
- III 社会事業に関わる諸事業の解説から
- IV 厚生、教育等の鍵概念にみる社会事業の思想
- V おわりに

I はじめに

本稿は、社会教育の理論的系譜の一つである「社会事業的社会教育および政策的社会教育」（以下「社会事業的社会教育」とする）の実態を考究するための基礎的な作業の一つとして、昭和初期の金沢市の社会事業の発展に寄与した安藤謙治（1893-1947）の社会事業思想の特質を明らかにすることを目的としている。

今回の研究対象である安藤謙治は、石川県金沢市の薬種商の老舗の長男として生まれ、家業を継ぐ一方で、石川県の社会改良委員の常務委員会長の任に就いた。社会改良委員制度が方面委員制度として更新された後は、石川県方面委員連合の会長を務めながら、野町校下の隣保事業として第一善隣館を創設し、初代館長として施設の経営にあたるなどして、金沢市をはじめ石川県における社会事業の発展に大きな貢献を果たした¹⁾。

こうした取り組みは、戦後の金沢市における公民館制度との関わりの中に変容していくこととなる。例えば、善隣館に公民館が併設されたり、善隣館の機能が教育面と福祉面とで分化され、公民館が開館されたことと引き換えに善隣館そのものが閉館していったりするなどのあゆみを辿っている。これらの経過も踏まえつつ、善隣館の創成期を支えた安藤謙治の思想を検討し、戦後の社会教育あるいは公民館制度につながる視点や思想の特質を明らかにしていく。

検討する史料としては、安藤謙治の執筆した論文、随筆等を取りあげる。具体的には、遺稿集『安藤謙治』²⁾（以下「遺稿集」とする。なお本稿では「遺稿集」からの引用を随所でおこなっているため、この本文中は引用部分の直後に「(頁数)」としてその引用元を提示する方法をとる）、中央社会事業協会社会事業研究所の発行した機関誌「社会事業」³⁾、軍人援護会機関誌「軍人援護」⁴⁾などの検討を行う。なかでも「遺稿集」は、「社会福祉人名資料事典」第4巻（日本図書センター、2003年）において、「全文が故人の卓越せる評論と研究事例の発表並に随想、日記抄、詠草を以て満され、世にある大半を美辞麗句の弔慰文を以て埋めたものとは大いに趣きを異にして個人の人格を彷彿するものあり、絶好の参考資料である」⁵⁾とされており、安藤謙治の実践に関わる理論的・思想的な背景を明らかにするうえで、重要な史料の一つを取り扱っている。

いずれにしても、安藤謙治の著作物は決して多いとはいえないなかでの研究であり、論理構成上の不備の指摘は免れない。当該地域でのさらなる資料収集活動が今後も引き続き必要である。

Ⅱ 社会事業史における方面委員制度の評価と分析の枠組み

社会事業史、社会福祉史の研究者である吉田久一は、「日本社会事業は、大正デモクラシーの影響を受けて、大正後半期に成立した。」⁶⁾としている。この場合の日本社会事業の成立とは、従来の慈善事業の時代には無かった方面委員制度の成立やセツルメント運動の隆盛、専門職養成機関と機会の誕生などといった「組織化」の契機を指している。なかでも「組織化」の中心には方面委員制度があり、より近代的な実践事例として大阪府方面委員制度が取りあげられ、この実践が方面委員制度の模範として各地に普及していったことが評価されている⁷⁾。実際に、金沢市における方面委員制度（当初は「社会改良委員」）の成立に大きく関与した石川県社会課長の赤堀氏の前任地は大阪であり、大阪府方面委員制度にも精通していたことなどからも、大阪府方面委員制度の影響力の大きさを垣間見ることができる。

しかし吉田は、方面委員制度の評価は難しいものであったことも同時に指摘している。吉田は、方面委員の多くが「各地方の性格に根ざして発生したが、漸次全国的統一の統合傾向を示した。（略）しかし資本主義の危機下における社会問題の拡大と質的变化、そこから生ずるケースの複雑化は、篤志家の方面委員にとってその処遇は困難となってきた。方面委員は篤志家中心か行政の補完か、ボランティアとしてのしろうと中心か、専門的処遇が中心か、方面委員制度は大正期の代表的組織化の事例であるが、このような点は当初から二律背反的に存在していた。」⁸⁾として、その位置づけのあいまいさを指摘している。こうした指摘を踏まえれば、本稿が石川県金沢市における方面委員の一人であった安藤の思想を検討することには地方史的な観点からも一定の意義があるといえる。

今回の史料を分析するにあたって、以下の視点を設定した。ひとつは方面事業や隣保事業など、社会事業関連の諸事業同士の関係がどのように論じられていたかという視点である。もうひとつは、それぞれの事業に関する説明において、厚生や教育、文化などといった概念の用いられ方を検討するなかで、それぞれの事業の特性や位置づけなどを検討するような視点を設定した。さらには、諸論考でしばしば言及される貧困や仁愛の精神といった概念に関する話題を分析する視点の設定をした。

Ⅲ 社会事業に関わる諸事業の解説から

（１）方面事業の役割と地域における位置

前述したように、吉田久一は大正から昭和初期における社会事業の中心的な事業の一つとして、方面事業および方面委員制度に注目し、その位置づけのあいまいさを指摘したが、この点に関しては安藤もまた「遺稿集」の「捉えどころのない方面事業」と題する論述において、図1のベン図を示しながら「政策と慈善事業との現在結合性にその存在を認めねばならぬか、」「イヤ、それでは方面事業の立つ瀬がない。」(158)として方面事業の独自性を表現することに苦心している。

その一方で、方面委員の役割については、同じく当時の地域社会を援護する役割を担った他の委員との関係を通じて次のように考察をしている。安藤は、「商業奉仕委員」と方面委員との協調関係に関する論考のなかで、方面委員の「地域の仲介役」としての役割について言及している。

商業奉仕委員とは、「應召商業者に代り仕入、配給、店員指導、金融、管理等経験知識を以て援助する」⁹⁾ほか、「生業資金下付願等の如き物質的援護に涉」¹⁰⁾る役割をもつものとされる。金沢市においては、方面委員連盟の理事長と常務委員が商業奉仕委員の常務委員、理事をそれぞれ務めるよう慣習化されるな

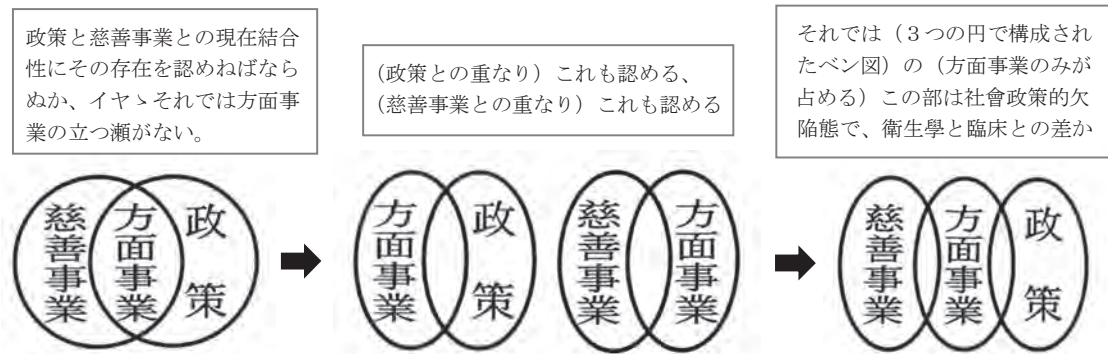


図1 「捉えどころのない方面事業」において使用されるベン図と安藤の解説（括弧内筆者）
（『遺稿集 安藤謙治』 pp.157-158より抜粋して筆者作成）

ど、非常に関わりの強い役職であったことが示されている。こうした慣習の背景には、当時すでに一通りの援護機関が地域に設置されている中で新設された商業奉仕委員などは諸団体との協調を図る必要があり、その仲介役として方面委員が欠かせないという事情が記されている。また、方面委員は受持ち地区を有しており、小地域的な活動であるのに対して、商業奉仕委員は業種別で組織され、地域的ではなく専門知識を活用した活動であるというところに違いがあることから、両者が相まって援護の徹底がなされることが期待されている。

また、ここで紹介されている方面委員の役割としては、各施設の設置経営に加えて、授産場の開設、軍人家庭調査票の作成、軍事扶助申請書の代書、扶助調書の作成、扶助金の交付等が職務とされている。また、商業奉仕委員のために金沢市内全応召産業者家庭の一斉調査を行い、調査票を提供するなどの役割も記述されている。なお、「遺稿集」では「調査」と題する箇条書きの記述において、方面委員制度の創出に携わった林市蔵と小河滋次郎を引き合いに出しながら、方面委員の役割について言及している。「一、小河博士、林市蔵氏何れも調査の重要を強調しておられるが実際に於ては所謂調査は方面事業に対して切実性がない」（156）。続けて、「三、方面事業では『心的関係』が重要であるので所謂『調査』の量的なものの不可能範囲にあるのか」（昭和一八、九、一九）（156）等といった指摘が目される。一般的に言われている方面委員の役割期待には掲げられていないような「心的関係」に方面委員の切実性や役割を見い出そうとしていたのかもしれない。

さらに、「方面事業の概念」に関する記述のうち「隣保との融合」と題された項目では、「自己の罪に依らずして国民生活を営み得ぬものに對しこれを援助し、發奮せしむるは國民的責任奉仕なりとする國民的課題を扶植し隣保自らこれを處置せしむるが如くす」（43）とあり、方面事業としての援助は國民の責務であり、地域の近隣住民自らがその対応にあたることをも想定した記述がなされている。

（2）隣保事業の使命と理念

金沢市における隣保事業は、方面委員が設立した善隣館を中心に展開された。これらの取り組みを踏まえつつ、安藤は「遺稿集」の中で「よく世上には、隣保館をヘルスセンターとして期待せらるる方もありますが、中心指導者が医師である特別の場合を除き、一般的には困難と思います。若し極言を許さるるのであれば寧ろ余暇善用の観点における慰楽センターとして農村の隣保館はあつていゝ、と思います。」（20）というように、余暇善用に主眼を置いた農村の隣保館の役割について言及している。その根拠には「勤勞のため増産のため健全なる娛樂の必要は云ふまでもないが、今日の農村に於ては娛樂はない、少なくとも

精神の潤澤化と言ふ意味に於て欠けて居ると思ひます」(20) という農村での生活に関する現状認識が示される。

他方で、都市部については、「農村に比すれば市街地の居住者は職業も同一でなく、勤勞と収入との関係も萬人萬様であり、工業勤勞者だけに於ても仕事は一様のものでなく従つてその考え方にも違いあり、殊に平素強い刺激に馴れている為に、ある者は何事も冷眼視する癖あり、ある者は徒らに好奇心にのみ駆けるなど、隣保館の対象として共通的な生活要求を発見するのも中々困難なものがあると思います。」(21) として、隣保事業の質の違いについて言及する。

ここで話題となっている余暇善用については、「以前には余暇善用と言つても、反對はせられなくともそれが人生に重要な意義があると思つて貰へず、殊に語をかえて慰樂と言へば寧ろ排撃せられた位でせう。然し今日に於ては余暇の善用は勤勞者と重大なる関連を持ち、余暇が善用さるれば能率的にも勤勞を効果的にし、もっと根本的には物を重んじ人を輕んじた世の中が、物は人に從屬することゝなり勤勞と余暇とは離して考へられないこととなりました。」(21) とあるように、勤勞とのかかわりにおいて余暇や娯樂を捉える視点が示されている。

こうした視点から、隣保館は特定の層に対して働きかけをする際には、「隣保館の対象は貧富の別なくこれを対象とすべきものですが、所謂有閑婦人だけは敬遠すべきです。指導は勤勞する婦人のその余暇を如何に善用するかでありまして勤勞あつてはじめて余暇があり余暇善用あつてはじめて明日の勤勞を増大拡張出来るものと思います。」と有閑婦人を避ける認識が示されている。

利用者層に関しては、むしろ「漫然と集めるよりは、まず近所の青年、何々青年団員、何々町会員、或いは何々の役を持った青年等という風に他の集団、組織を利用してその上に新しい関係を覆い、中心指導者と対象との関係は切つても切れない関係になってしまえばそれだけで事業の目的を半ばは達したと同様」(22) とするように、集団や組織との関わりを念頭に置いた考え方が示されている。この点については、実際に安藤謙治が館長を務めた第一善隣館の運営実態として指摘されている内容と合致する¹¹⁾。

加えて、隣保館は「全人格的な接触に於て個人よりも家族を目標にすべきであり、この共同意識に於て生産も消費も教育も宗教も娯樂休養の問題も更に老幼病弱の保護も解決され実践さるるものと思います」(27) として、隣保館の事業の幅広さと可能性について記している。

IV 厚生、教育等の鍵概念にみる社会事業の思想

(1) 厚生、救済

「遺稿集」の「實際處置としての方面事業」と題した記述には、厚生事業と社会事業とを比較しながら、方面事業の範囲が示されている。社会事業の「『要救護性の概念は経済的には最低生活費を下降する意味のマイナス概念であり、厚生事業はそれを上回る優強国民の錬成という概念である』としたら、現在やっている方面事業は社会事業であると共に厚生事業であり、更に厚生運動が『特定集団の成員が相互に日常生活を刷新し余暇を善用し心身を錬磨し清操を醇化し、以て人的資質の向上を図るを以て目的』とすれば、所によつてはかかる運動の推進も方面委員の名を以て行っているものもあらうと思われ、端的に言えば方面事業は社会事業のみでないと思はれる」(27, 28) とあるように、方面事業は社会事業と厚生事業の重なるところにその役割が置かれたような説明がなされている。具体的には、方面事業では社会事業が任務とする要救護者の対応に加えて、厚生事業が任務とする最低生活費の水準を上回る国民に対する余暇善用などの推進をも、その仕事として捉えることが明記されている。

また、「遺稿集」の「最近方面事業がもてはやされない理由」と題した記述のなかで、方面事業の「政

治性」が希薄であることを挙げ、その例として「(一) 例えば翼賛会の厚生と方面事業の厚生とを比較する。前者は生産増強のために健康を取りあげ、その為に結核対策を考えるが、生産増強のためには健康も犠牲にするはやむを得ないとする。後者は健康のために結核問題を取り上げ、結核のためには過労を防ぎ、一時勤労をやめるのも止むなしとする。」(153)と説明している。安藤は、方面事業における「厚生」は個人の健康改善を目的にしたものであり、国家主義的な政策として行われる翼賛会の「厚生」とは区別して考えていたことが示されている。

「遺稿集」の「方面事業の概念」と題した記述のなかで、「事業の重点」に関する項目では「新しき方面事業は自由放任の結果災害が生じた後、初めてこれを救済するに非ずして、窮乏の諸原因を抜本塞源し徒に非生産的な救護にのみ終始する絶望的なものより解放されなければならない。即ち其の目的は要救護者を速に自立せしめることであり、被救護者に精神的活力を吹込み困窮に對する抵抗を喚起しこれを教育し自立の精神を獲得せしめるにある。」(42)と説明している。すなわち、方面事業では事態が生じてから取り組むような非生産的な救済を続けるのではなく、その原因に働きかけることが重要であり、その方法として「精神的活力を吹込」むことや「教育」などが取り上げられている。

(2) 教育、文化

「遺稿集」の「方面事業の概念」と題した記述のなかで、「處置の順位」として安藤の考える方面委員の取り組みの優先順位が示されている。「第一に教育、衛生、育児、勤労、就職等の処置を重視し、物質的生計のための保護救済はこれを下位に置く。又単一なる個人よりも家庭に重点を置き、殊に家庭と郷土とに重要な関心を持つ」(42)とあるように、方面事業の処置において第一に優先される項目として「教育」が置かれている点が注目される。

また、同じく「遺稿集」の「方面事業の回顧」と題された記述では、方面事業が発足して20年ほど経過した時期に「この時代、農村に於いては農村更生が強調された。然し今にして批判すると農村指導者の明がなかつたと思はれる。即ち農村窮乏を収入の増加に對策を求め、生活の知足を教育せなかつた。これが一般の大勢に遅れた指導で或は今日農村が反って悪いなどとの非難がある遠因を成しているのではないかと考へられる」(175、176)として、ここでも方面事業の仕事として教育の重要性が示されている。

この他にも「大体に言えば方面事業は経済より文化、個別指導より集団指導、個人活動より組織活動へと変遷した。(略)文化も含むという意味である。その他も同様である。」(28)「ここに言う集団は単に人を寄せ集める、たとえば結核の集団検診の如き意味ではなく、個性、自我を持つ社会団結の、たとえば村とか町とか或は年寄仲間とか言う意味である。また文化の種類は学問、芸術、宗教などではなく現実日常生活のものを指している」(29)などの記述が注目される。

(3) 政治

安藤の「政治に關與せざるが安全であるが民衆の政治教育は方面委員の關心すべきことである」と題した論考のなかで、「政治」と方面委員との関わり方について解説がなされている。本論考が念頭に置いている政治問題とは、1930年頃に取り組みされた「救護法実施促進運動」としつつ、方面委員が政治問題に關与することの可否に関しては、「僕は前述の通り消極的な考へを持ち關与せない方が安全であると云ふ」¹²⁾としている。実際に、金沢市の方面常務委員の間では、議員選に出ないこと、もし出馬するときは方面委員を辞することという申し合わせがなされたようだ¹³⁾。

その一方で「今日では政治家は自分自身の個人的な聰明とか善良、偉大等だけでは議員になり得るゝ

ものでなく、寧ろその點は瑣末な要件で如何に投票を多量に集め得るかの運動技術が重要な要件となり従って次第に選挙が腐敗し、選挙肅正が叫ばれなければならないとなつてゐるが、この政治教育に就ては方面委員は無關心で将来はあつてはならないことにならう¹⁴⁾としている。加えて、「方面委員の仕事の将来には必ず郷土の政治教育は織り込まれる必然性を有し否現在に於ても隣保館に事務所を置く方面委員部にとつては直に着手せなければならない題目である」¹⁵⁾ともしている。

(4) 貧困

「遺稿集」の「最低生活と方面事業」と題された記述には、保健、経済、勤労の三要素を満たせていない生活を送る人々を方面事業の一つの対象者と捉え、その介入の方針として「衣、食、住、保健、教育、厚生に有する奢侈的部分を壓縮す」(163)としている。ここに一つの貧困観が現れていると考えられる。続けて「然しそれには能率を維持する限度がある(これを最低栄養線とす)。こゝに於てその壓縮前に既に壓縮されている点がないかを見極める必要がある。被救護、被扶助家庭に於て食と住とが現在に於て最低栄養線を割っていないかといふ疑問がある。乳兒、幼兒の攝取する栄養は維持以上のものが要る。即ち成長のための栄養である。この成長に必要な栄養を割ってはいないだらうか、即ち最低栄養線を割ってはいないだらうか。」(164)としており、一般的な指標に頼り切らずに、生活者の実情にまで踏み込んで貧困状態を捉える必要性が示されている。例えとして、子どもの場合は維持ではなく成長のための栄養が「最低栄養線」として認識される必要があるものとされている。また、方面事業はこうした不足や欠陥を修正するところに役割があるとして、その問題に気づくためには「方面事業の基礎に『學』がなければならない」(164)としている。

この他の貧困に関する記述として、「遺稿集」の「最近方面事業がもてはやされない理由」と題した記述が注目される。ここでは「(二) 方面事業は救貧事業であるという認識の上に立って最近の個人的所得増加によって現在並びに将来に於て個人的貧困を考えない傾向がある。(昭和一八，九，一九)」(154)との指摘がなされている。

(5) 仁愛の精神

「仁愛の精神」をめぐる記述は、方面委員制度が戦後の民生委員制度とどのような接続を果たすものだったのかという点について安藤の考えが示されており、第二次世界大戦前後の社会事業思想との異同について言及するものとして注目される。

「仁愛の精神」は、1946年に生活保護法と同時に公布された民生委員令第一条において、「民生委員は、社会の福祉を増進するために、仁愛の精神を以て、保護誘掖のことに従ふ。」として使用された言葉である。安藤は「『隣保相扶の醇風に則り、互助共済の精神』を以てする方面委員が無くなって、『仁愛の精神』を以てする民生委員が生れた」(171)として、「仁愛の精神」という言葉の検討を通じて、民生委員令の方面委員令との異同について説明を試みる。端的には、「遺稿集」の「『仁愛の精神』論」と題された記述のなかで、「『仁愛の精神』は一方に於て委員の心構えとして、一方に於て隣保の生活原理として把握されねばならない」(84)と説明されている。

安藤によれば、従来の方面委員は「篤恵思想」、すなわち人情に基づく恩恵としての事業という考え方が根強く、これに対して新しく公布された生活保護法に「恩恵否認の態度」、「冷厳性」といった側面が指摘されたことで、生活保護法と同時に公布された民生委員令にも「恩恵否認の態度」(つまり方面委員の「篤恵思想」に相反する態度)があつてはならないとして、「篤恵思想との妥協から『仁愛の精神』の挿

入を行つた」(83)と説明されている。ここから「仁愛の精神」は方面委員の独自性を引き継ぐ言葉とされる。

そのうえで、「しかしこれでは委員の時代逆行であつて、一切が社会化の思想にある現在これでは不十分を免れない」と述べ、民生委員の「心構え」だけではなく、民衆にとっての「生活原理」との関わり、すなわち社会的な意義の解説を試みている。

V おわりに

本稿では、日本の社会事業の成立の契機となった方面委員制度について、石川という土地で深く関与した安藤謙治の記述を分析することで、その社会事業思想の特質を地方史的な観点をもって検討してきた。安藤は、慈善事業や政策などとの関係性のうちに方面事業の独自性を表現することに苦心しつつも、「地域の仲介役」としての役割や「心的関係」に取り組むことの必要性などといった点にその特徴を見出していた。また、社会的な理由から困窮状態にあるものの援助は国民の責務であり、地域の近隣住民自らがその対応にあたるのが方面事業の概念のひとつとして説明されていたことも注目された。

また、隣保館の役割については、農村と都市とでその役割や質の違いについて言及しつつも、基本的には余暇善用に主眼を置いた機能があることを説いていた。また主な関係主体としては、青年団や町会等の地域の集団や組織との関わりを念頭に置いた考え方があることが示されており、隣保館の事業の幅広さと可能性についての記述もみることができた。

さらに、「厚生」等の鍵概念に注目するなかで、方面事業が個人の健康改善を目的にしたものであり、国家主義的な政策として行われる「厚生」とは区別して考えられていたこと、事態が生じてから取り組むような非生産的な救済を続けるのではなく、「精神的活力を吹込」むことや「教育」などを通じてその原因に働きかけるのが重要であること、方面事業の仕事として「(政治)教育」が優先的に位置付けられていた点などが注目された。

以上の内容だけでも、安藤の記述の端々には戦後の社会教育あるいは公民館制度の理念との共通性を見て取ることができ、社会事業的社会教育の実態を示す好事例として引き続き検討していく必要があると考えられる。

ただし、本稿に残された課題は少なくない。本稿で検討してきた安藤の記述には、石川の地域性のようなものを見出すことは十分に達成できたとは言い難い。そもそも、安藤謙治という人物に注目すること自体が地方史的な研究アプローチであるとも考えられるが、そこから一步踏み込んで、なんらかの地域性を見い出すことにこだわりながら、今後も究明を続けたい。

注

- 1)『遺稿集 安藤謙治』によれば、「社会事業に盡瘁貢献した功績によって藍授くママ>褒章を賜り、更に数年後には宮中に召され参内して天皇陛下に社会事業について御進講の光榮に浴した」として、大きな功績が社会的に認められていたことが述べられている(住吉四郎「畏友安藤君を憶う」13頁より)。
- 2)浦上太吉郎『遺稿集 安藤謙治(復刻版)』石川県連合民生委員会、2002年。
- 3)安藤謙治「金澤市に於ける方面委員と商業奉仕委員との協調」軍人援護會『軍人援護』(69)1939年、42-44頁。
- 4)安藤謙治「政治に關與せざるが安全であるが民衆の政治教育は方面委員の關心すべきことである」中央社会事業協會社会事業研究所『社会事業』19(11)二月號、1936年、52-55頁。
- 5)『社会福祉人名資料事典』第4巻、日本図書センター、2003年、549頁。

- 6) 吉田久一『現代日本社会事業史研究』勁草書房、1979年、130頁。
- 7) 同上、133頁。
- 8) 同上、134頁。
- 9) 安藤謙治「金澤市に於ける方面委員と商業奉仕委員との協調」軍人援護會『軍人援護』(69) 1939年、43頁。
- 10) 同上、43頁。
- 11) 第一善隣館の場合は、野町青年団との関わりが深く、一部の施設を占有的に使用していた実態などが明らかになっている（大村隆史「社会事業的社会教育の实践と施設の位置づけに関する史的考察—石川県金沢市の第一善隣館を事例に—」香川大学『香川大学地域連携・生涯学習センター研究紀要』(26)、9-16頁、2021年3月)。
- 12) 安藤謙治「政治に關與せざるが安全であるが民衆の政治教育は方面委員の關心すべきことである」中央社会事業協會社会事業研究所『社会事業』19(11) 二月號、1936年、54頁。
- 13) 同上、53頁。
- 14) 同上、54頁。
- 15) 同上、54頁。